



市長と市議会への『陳情』提出を記念して、日野原重明先生と山崎章郎先生をお迎えした  
講演会『府中でも実現したい 地域で家庭で ホスピス・緩和ケアを』を開催

小西 厚子

府中に「ホスピス」がほしいと、考える会を設立して活動してきた私たちは、昨年、府中市長への署名を添えた『陳情書』と府中市議会への『陳情』を届けて、市民活動としての目的を一つの結果にしました。

そこで、これを記念して、平成 22 年 5 月 2 日（日）午後 2 時半からルミエール府中・コンベンションホール飛鳥において、府中市からの後援もいただいた講演会を開催いたしました。講演会のテーマは、考える会が府中に実現したいと陳情した「ホスピスケアの核となる施設」（通信 12 号 3 ページ参照）に関するものであり、講師には「ホスピス」については日本最高の権威者でいらっしゃる日野原重明聖路加国際病院理事長と山崎章郎ケアタウン小平クリニック院長をお願いいたしました。

当日の参加者は、会場定員 600 名に迫る 595 名でした。この参加者の中には、ご挨拶をいただいた野口忠直府中市長と高野律雄府中市議会議長をはじめ、市議会議員、市職員や医師会会員の皆様も含まれます。当会顧問の十蔵寺新東府中病院長とご一緒に参加された十蔵寺澄子夫人が、花束のプレゼントを、壇上で両講師へお渡しくださいました。日野原先生のうれしそうなお姿が忘れられません。また、東京都立野津田高等学校・福祉科の山田哲美先生が 1 年生の男女学生 20 名を引率されて、ボランティアで会場の案内役をしてくださりました。高校生の皆さんがとても丁寧に対応してくださり、感激したという声を参加者から聞きました。高校生の皆さんは、殆ど席が埋まっていたので、会場の後方で立ったまま講演を聞いていたのですが、彼らにとってこの講演会がよい勉強になったことを、会の主催者としての感謝とともに願っています。

講演会・両講師の対談の司会は、平野真澄ライフ・プランニングセンター所長をお願いしました。時間内におまとめいただいた司会者に感謝申し上げます。講演会は、盛況に、無事に終わりました。

講演会参加者に、プログラムとともに当日発行した「通信第 12 号」の他、「通信第 10、第 11 号」を配布しました。考える会の活動報告と貴重な情報をお伝えすることができたと思います。

平成 21 年度・第 9 回定期総会は、平成 22 年 5 月 23 日（日）に片町文化センター・講堂で開催しました。総会では、今年度の活動としては、市や市議会に提出した『陳情（書）』の結果の方向を見守りながら、今年度も勉強会（講演会）をしながら、考える会が実現したい「ホスピスケアの核となる施設」の開設を発信していくことを、出席会員の皆様にご了承していただきました。5 月 2 日の「講演会」参加者に当日入会者があったり、「何かお手伝いできればしたい」とご連絡をいただいた方々もいらして、会の活動の継続への力強い皆様のご支援に会を代表して感謝します。

第 27 回勉強会は、8 月 22 日（日）に、片町文化センター・講堂において、在宅支援診療所ピースクリニック中井院長 永山淳先生を講師をお願いして、『在宅緩和ケア「いつでも・どこでも・どんな病気でも、きれめのない緩和ケア」のために』と題するお話を伺いました。

また、第 8 回府中 NPO・ボランティアまつりの 2 日目、11 月 28 日（日）午前 10 時～4 時まで、グリーンプラザ 5 階のブースで、『府中で「ホスピス」を実現したい!』のタイトルで、パネル展示や 5 月 2 日の『講演会』の DVD 上映などによって、考える会の活動を市民の皆様にお伝えしました。

「通信第 13 号」は、5 月 2 日の講演会の内容報告を中心に、編集して発行することにしました。第 27 回勉強会の内容は次号で報告します。



## 講演会『府中でも実現したい 地域で 家庭で ホスピス・緩和ケアを』

③

日時：平成22年5月2日（日）14:30～16:30

場所：ルミエール府中 コンベンションホール飛鳥

### 講演1 「地域で取組む緩和ケア」 講師 ケアタウン小平クリニック院長 山崎 章郎氏

現在、日本人の2人に1人がガンになり、3人に1人がガンで亡くなっている。ガンは老化等に伴って免疫力が無くなって罹る病気で、長寿国家日本では、10年後には2人に1人がガンで亡くなる時代が来る。しかし、ガンと診断されてもあわてず、治療の選択肢はいろいろあるので、セカンドオピニオンも聞いて、ゆっくり考えて判断しても遅くない。ガンをとってしまえば、半数の人は完治する。外科医であった山崎先生は、ホスピス医として桜町病院に14年勤務した。

ホスピスで学んだことは、緩和ケアの大切さ、医療についてのインホームド・コンセントの大切さ、医療のチーム（医師、看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカー等）ケアの大切さ、患者を支えるボランティアとの協働の大切さ、生きる意味を見失ってしまった人々へのケア・スピリチュアルケアの大切さ、大切な人を亡くす喪失の悲しみにある家族をサポートするグリーフケア（悲嘆ケア）の大切さ等である。とくに、ガンの苦痛を和らげる緩和ケアは、世界標準のWHO方式が重要である。

WHO（国連保健機関）による緩和ケアの定義：緩和ケアとは、「生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、病気の早期より、痛み、身体的問題、心理-社会的問題、スピリチュアルな問題に関してきちんとした評価をおこない、それが障害とならないように、予防したり対処したりすることで、QOL（生活の価値・質）を改善するためのアプローチである。」

日本では、ガンで亡くなる人の80%は、病院で亡くなっている。施設ホスピスの重要性を理解した上で、施設ホスピスでは来院した人にしか医療ができないという限界があり、待っているのではなく、出かけて行って、自分の経験を多くの地域の人に、在宅での緩和ケアに取り組もうと、ホスピスを離れて、5年前にケアタウン小平の開設にいたった。

ケアタウン小平は、山崎先生が院長を勤めるケアタウン小平クリニック・在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション、在宅介護支援事業所（ヘルパーステーション）、デイサービス（ナイトサービス、ショートステイに対応）、子育て支援、ボランティア等の機能が一箇所にまとめられている。特に、在宅の患者のためには、チームとして取組み、患者の情報を共有して、ケアタウン小平を中心とする2km圏内の在宅患者へのデイサービス（医療処置も入れて家から離れられない患者を送迎して受け入れている）、3km以内への訪問看護と在宅介護の24時間対応、そして4～5km圏内の在宅患者への医療や緩和ケアは3名の医師が24時間365日対応している。

2005年3月から2009年12月までに看取った合計325人の内、がん患者272人（在宅死亡=188人=69.1%、病院=84人）、非がん患者53人（在宅死亡=40人=75.5%、病院=13人）である。最期を病院で終わる人の場合は、在宅での介護が不可能である人で、介護が可能であれば在宅で終われる。

最後に、在宅緩和ケアの介護保険上の課題をあげて、現在約200箇所ある施設ホスピスと共に、在宅を支える「地域在宅緩和ケアセンター」の設置を提案されました。

### 講演2 「生きる想いを支えるホスピス・緩和ケア」 講師 聖路加国際病院理事長 日野原重明氏

今年10月に99歳になられる日野原先生は、この日、5時半に起床して7時半にフジテレビへ行き長妻厚生労働大臣（当時）等との討論にご出演されて府中にいらしたとのこと、聴衆を和やかな雰囲気にならながらお話を始めた。考える会が「地域で家庭でホスピス・緩和ケアを府中でも実現したい」のためには、私のノウハウを提供すると、心強いお言葉をいただきました。

人生の最期を自宅で家族に囲まれて終わりたいという願いは、現在の日本ではかなわなくなっている。日本人の死亡場所が病院であったのは、1960年には18.2%であったが、2007年には70.4%。がん患者の場合は、1960年31.6%だったのが、2007年89.9%が病院で、1960年63.6%が2007年6.7%が自宅で最期を迎えている。ホスピスはあるが充分でない日本の現状ではあるが、山崎先生が道を創られたようなケアタウン



小平クリニックがあれば、自宅で最期を終えることができる。

人間には人生の最期は誰にでも来るが、死んだほうがましだというような痛みをとって、モルヒネを注射して、すーっと眠るようにあの世に逝けるのが、終末期医療としての緩和ケアである。人生の最期、医学的な協力を得て『皆さん元気でね、ありがとう』、家族に『幸せな人生だった』と言いながら終えるのが人生の最高のありかたである。ターミナルケア (Terminalcare) を終末期医療と訳していたが、新しい命名で「終末期ケア」とする。この終末期ケアは、ホスピスでのテnder・ラビング・ケア (Tender Loving Care=TLO)、テnderとは愛を形容する最高の表現で、医療の世界では大切な言葉として使われている。ホスピスでは、チームの人が患者さんに寄り添う「癒しのケア」が行われている。

「癒しのケア」とは、「ある患者へのケアは、水が器に添うように、患者一人一人によって個別であり、固有なものでなければならない。患者へのケアは、サイエンスに支えられたアートである。このアートの技を獲得するには、たゆまない修練を要する。音楽も絵画も作詞、作曲も絶えざる修練が繰り返され、経験が加わって上達する。医学も看護も同じである。」(日野原重明)

最後に日野原先生がおっしゃったこの言葉を聞きながら、テレビで拝見した現役の医師として病室の患者さんを診まわられていられる先生のお姿を思い出しながら、先生のお話を伺えた今日の感動を心に刻みました。

### 対談：両先生のメッセージ

山崎先生：地域で家庭でホスピス・緩和ケアを府中でも実現したい、と言うのであれば、私の経験をシェアしてご協力ができます。苦痛をやわらげる工夫をしながら住み慣れた地域や家にいること、在宅の方が、病院に居るより、苦痛の感じ方が違うのではないかと感じます。



日野原先生：人が死ぬ時、死後の措置は何もいらないのです。日本では綿をつめたりするが、外国では体を拭くだけで何もしません。静かな音楽をかけてあげて、静かに送るとよいのです。私は、フォーレの「レクイエム」を聞きながらあの世に逝きたいと思っています。

(講演内容要約の文責は編集委員)

### 府中ホスピスを考える会 第9回 定期総会議事要約

日時：平成22年5月23日(日) 午後1時30分～4時30分

場所：府中市片町文化センター 3階 講堂

議事要約 開会挨拶：小西会長

#### 第9回定期総会 議事次第

- (1) 議長選出 総合司会の提案により窪田副会長を、会員の拍手により議長に指名
- (2) 第1号議案 平成21年度事業報告 (小西会長報告)
- (3) 第2号議案 平成21年度会計報告 (宇田会計幹事)
- (4) 第3号議案 監査報告 (三宮監査役)
- (5) 第4号議案 役員改選 (小西会長) 現役員再任案を提案・承認
- (5) 第5号議案 平成22年度事業計画 (案) (小西会長口頭で提案) 勉強会年4回・会報年2回・ボランティアまつり参加等。
- (6) 第6号議案 平成22年度予算 (案) (宇田会計幹事) 提案・承認
- (7) その他

閉会挨拶 (小沢副会長)



## 府中ホスピスを考える会講座実施歴

日付	テーマ	講師	(敬称略)
特01/10/28	がんと向きあったとき、あなたならどう生きますか	聖路加国際病院名誉理事長	日野原 重明
1 02/02/17	「ホスピスの体験から」	ピースハウス病院ナース	杉本 真由美
2 02/04/28	「在宅ホスピスケアについて」	ピースハウス病院ナース	杉本 真由美
3 02/07/14	「緩和ケアで使われる薬について」	薬剤師(元ピースハウス病院職員)	玉井 照枝
特02/10/11	アサヒタウンズ特別講演会「日野原先生」		
4 02/11/24	「心と身体の痛みを癒すには」	くらしき作陽大学教授	篠田 知璋
5 03/05/18	地域に密着した在宅ケアについて	平林医院院長	平林 竹一
6 03/06/10	ホスピスセミナー	桜町聖ヨハネホスピスケア研究所長	山崎 章郎
7 03/08/03	「ヨーロッパのホスピス事情」	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
8 03/10/26	家で最期をむかえるためにー在宅ホスピスケアの実際	ホームケアクリニック川越院長	川越 厚
9 04/04/18	「家族の立場からホスピスケアを見る」	府中ホスピスを考える会会員	駒ヶ嶺 素秀
10 04/09/10	輝いて生きるー人生の後半をー	聖路加国際病院名誉理事長	日野原 重明
11 04/11/07	コミュニティで考えるこれからのホスピスケア	聖ヨハネホスピスケア研究所研究員	長谷 方人
12 05/06/05	夫をガンで見送ってー入院治療3ヶ月後の不安ー	府中ホスピスを考える会会員	森山 レイ子
特05/09/24	地域で生きるー尊厳ある生と死を求めて	聖ヨハネホスピスケア研究所長	山崎 章郎 他
特05/10/30	いのちと響き合う絵本	ノンフィクション作家	柳田 邦男
13 05/11/26	更年期障害と子宮癌	東府中病院長	十蔵寺 新
14 06/03/26	人間のいのちと死ー終末期医療からみる	医学博士・医療法人恵風会施設長	渡邊 寛宣
15 06/05/21	千倉市「花の谷」(ホスピス)の紹介	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
16 06/08/20	NHKビデオによるホスピスに関する Q&A	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
特06/09/09	永六輔 いのちを語る	ケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催	
17 06/11/11	ときめく「命(いのち)」をいきる	青山学院大学講師	野村 祐之
18 07/04/01	さいごまで生きる施設ーホスピスーでのとき	ライフプランニングセンター所長	平野 真澄
19 07/06/24	「いのち輝かせて生きる」ーこどもから老人まで	聖路加国際病院名誉理事長	日野原 重明
特07/10/13	鎌田実 いのちを語る	ケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催	
20 08/01/20	「地域におけるホスピスケア」ー患者と家族の心を支えるー	医療法人社団イバラキ会	高野 和也
21 08/05/25	「ホスピスケアにおける訪問看護の役割」	医王訪問看護ステーション地域専門看護師	宮田 乃有
22 08/08/03	阿伎留医療センター緩和ケア病棟の現状	公立阿伎留医療センター緩和ケア科・医師	戸澤 育文
23 09/01/25	ビデオによる「ホスピス緩和ケアの歩み」	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
24 09/05/17	府中市における訪問看護ステーションの現状	府中市医師会訪問看護ステーション所長	芝尾 幾世
25 09/11/15	ホスピスケアの核となる施設の実現に向けて	ボランティアまつりパネルディスカッション	会の役員
26 10/05/02	府中でも実現したい 地域で 家庭で ホスピス・緩和ケアを	ケアタウン小平クリニック院長 聖路加国際病院理事長	山崎 章郎 日野原 重明
27 10/08/22	在宅緩和ケア「いつでも…緩和ケア」のために	ピースクリニック中井院長	永山 淳
28 10/11/28	府中「ホスピス」を実現したい	府中 NPO・ボランティアまつり	会の役員

会計より会員の皆様へのお願い 会費の払い込みをどうぞよろしくお願いいたします。勉強会・講演会等当日でも、郵便局への振込でも結構です。振込用紙ご入用の方は、会計までご連絡いただければお送りいたします。

会計 宇田ひさ子 042-363-9271

編集後記 今年もあと数日を残す押し迫った師走、ようやく今年の活動報告をお届けする次第です。考える会の、「府中にホスピス」を実現したいという思いは、来年に持ち越されることとなります。

考える会にとって新年がよい年になりますよう、また、会員の皆様のご多幸を祈っています。

「通信」編集委員 小西、荒川、駒ヶ嶺、和田

発行元 府中ホスピスを考える会編集部 連絡先 小西厚子 042-361-2823